

1988-2

No.233

【表紙】

蒔繪龍鳳文八角香盆

磯井如真

昭和30年作

・解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

特集：歴史の道整備の十年

随想	
旧道を歩いてみる	児玉幸多 4
石畳は残っていた	佐藤成一 6
秋往還の整備	山城右二 8
熊野古道雲取越	木村 靖 10
解説	
歴史の道の調査と整備	文化庁記念物課 12
—この十年間の歩み—	

都道府県のページ

我が県の文化行政⑩	
芸術鑑賞教室と海外公演助成	福井県 14
特色ある文化活動⑥	
心と心の和の力	静岡/Vパさんコーラス 17
第3回国民文化祭ひょうご88	19
公募部門の応募（募集）要項の検討状況について	
都道府県月間行事予定 2月	22

ぶんか ブンカ

「四季—日本の美術—」展	鈴木規夫 21
に随伴して	

文化行政質問箱

文化財保護5	土木工事中に遺跡を発見した場合は？ 23
著作権8	ホテルのロビーやスーパーの店内で音楽テープを流すことは？ 24

文化庁だより

文化庁ニュース	
・昭和62年度（第42回）芸術祭賞決まる	25
・史跡等の新規指定等	26
展覧会紹介	
古筆と手鑑	29
ジエリコー展	29

・文化庁行事報告及び予定	30
・国立劇場ニュース	31

ものが、今は国道一号線の日坂トンネルの東側の丘の上にある。この方が古くからのものだという。峠の下り口近くに一里塚があったが、今は標識の札があるばかりである。ここは自動車も殆んど登れない道で、ハイキングコースになっている。

中山道には東海道よりも旧観を残した道が多い。和田峠にも「歴史の道」として整備された所もあり、妻籠（木曾郡南木曾町）と馬籠（同郡山口村）の間には、文化庁の歴史の道保存整備事業の対象地区となつて、すっかり歩きよくなった山道もある。しかしこの道は歩く人たちが多すぎるといえる。

それに比べると、美濃へ入って、大井宿（恵那市）と御嶽宿（可児郡御嵩町）の間が、あ



久延寺境内にある夜啼石



琵琶峠の石畳
(昭和45年に発見されたもの)

まり人の訪れない自然道である。大井宿と次の大久手宿（瑞浪市大湫町）の間には十三峠と言われる十幾つもの峠があつて、石畳も所に残っているが、自動車は通れないので昔の姿を残し、東海自然歩道になっている。その幾つもの峠を越えた所に大久手宿の集落があり、問屋場と脇本陣のりっぱな建物がある。ここから次の細久手宿（瑞浪市）の間も東海自然歩道で、半里ほどで琵琶峠にかかる。杉林や雑木林や石畳道を四町ほど登ると頂上である。東北には木曾の御嶽、北には飛騨の山の間から加賀の白山が見え、西には伊吹山が見える。美濃の中山道中で最も高い所である。

琵琶峠の両側にも昭和四十五年に発見された石畳が自然歩道事業などで整備されて、七町ほど残っている。やがて八瀬沢の一里塚があるが、琵琶坂一里塚とも言い、県指定の史跡である。そこから、だんだら下って行くと右手に弁天池があり、池中の小島に小さい祠

がある。この辺は昔は松並木があつたというが、今は二、三本の赤松があるだけである。その先の奥之田の一里塚も県の史跡に指定されている。

細久手宿は自動車も自由に入れる道筋で、従つて昔の面影は薄い。しかし旧道には開発の波はまだ及ばず、平岩根峠や物見峠などを登り下りする。二つの峠の間にある鴨之巣の一里塚も原形を存し、県の史跡である。

十三峠からは中山道中でも旧観の多く残っている。自然歩道の名にふさわしい道筋をたどつて御嶽宿に入る。ここは美濃平野の東端で、長い山道も終わりにするのである。御嶽宿は宿場町というよりは天台宗の名刹大寺山願興寺の門前町である。薬師如来を本尊として、可児薬師または可児大寺と呼ばれているが、本尊を初め二十四体の仏像が重要文化財に指定されている。本堂や六百巻の大般若経など県の重要文化財はいくつもある。

「歴史の道」といふ所は、全国にはまだ幾らも残っている。それを今後もどのような形で残すのがよいのか。動いている世界に順応させてつづきの語る歴史や文学をどう伝えていくのか。

「歴史の道」の調査報告書は、一部の県では市販もされているが、一般には入手のできない所が多い。調査結果をなるべく広く利用できるようにして、その成果のなかから保存の道を考えて出すようにしたいものである。

随想

旧道を歩いてみる



文化財保護審議会委員 児玉幸多

文化庁の補助によって各県の「歴史の道」の調査が進行し、それにつれて古道への関心が高まってきたような感じがする。とは言つても近世の道でさえ昔どおりにたどることは困難である。新しい道ができて古い道が切斷されてその面影を残さないようになつた所もあるし、廃道に近くなつた所もある。しかし新しい道がバイパスとなつて、旧道が文字どおり歴史の道として親しまれている場合もある。

街道と言つた。熊本県から大分県下へ向うのは豊後街道であり、長野県の伊那地方を通る伊那街道は三州街道とも言つるのは三河に入るからである。

しかしその古い道も鉄道や自動車の発達で主要交通路としての地位を失つたものもあり、新しい道路によって切斷されて旧態を止めない所もある。箱根の峠道はほとんど直線的に上り下りした険路であつたのに、蛇行する自動車道で寸断され、神奈川県側はどうやら旧道をたどれるが、静岡県側は草むらに埋れてしまつた所が多い。交通量の多い東海道では道路の拡幅や市街地の区画整理などで、古い町並が失われた所が多い。近年重要伝統的建造物群保存地区に指定された、鈴鹿峠に近い関町はさすがに昔の雰囲気を残しているが、戦災で全く変貌した町もある。

街道の古い姿を残しているのは峠道などで、自動車の通らないような所である。東海道で言えば宇津谷峠が小夜の中山あたりであろう

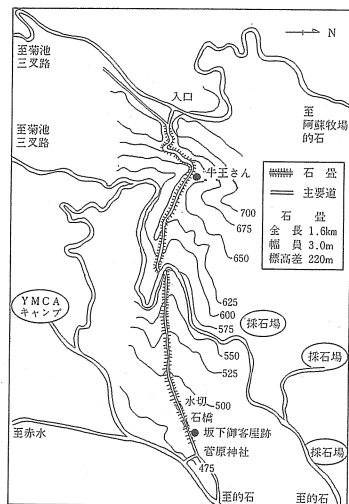
か。宇津谷峠は丸子宿（静岡市丸子）と岡部宿（志太郡岡部町）の間にある。「伊勢物語」の「駿河なる宇津の山へのうつつにも 夢にも人にあはぬなりけり」の歌で知られ、その山道は駕の下道とか駕の細道と言われたが、豊臣秀吉が小田原の北条氏を討つために東下した時に新しく道を開き、それが近世の東海道となった。峠の東麓にある宇津谷の集落（静岡市宇津ノ谷）に古い姿が残る。しかし明治になつてトンネルが出来て、峠まで登らないですむようになり、昭和の初めに、それより北に新しいトンネルが出来、さらに昭和三十三年に新宇津谷トンネルが出来たので、古い道をたずねる人ばかりが訪れる集落になつてしまつた。

小夜の中山は金谷宿（榛原郡金谷町）と日坂宿（掛川市）の間にある。その東麓の菊川は古代から中世へかけての宿駅で、建久元年に源頼朝が上洛した時にも一泊した所であるが、近世では閑村となり、今は何の風情もない。それより急な坂を上つた所が小夜の中山である。ここは西行法師の「年たけてまた越ゆべし」と思ひきや 命なりけり小夜の中山」でよく知られていた。峠を上つた所に久延寺があり、慶長五年、関ヶ原の戦いのために西上する徳川家康のために、掛川城主の山内一豊が茶亭を設けて接待した所である。

この寺の庭に丸い石があり、夜啼石と説明がある。夜啼石には色々な伝説があるが、夜啼石はもう一つ、峠の西の麓の道中にあつた



昭和61年度 石畳修復



二重峠石畳図

交通路は生きものである、私達が気づかない間に、又、世の移り変わりによって消えやすいのが道である。それ故に歴史の道は今保存整備しなければ先人の意志や苦勞を無にすることになるのではないかと強く感ずるしだいである。

右、地藏尊は文政五年（一八二二）の作とある。

（熊本）二本木 光 平

世話人 大津 松屋幸助

左、地藏尊は天明二年（一七八二）の作

岩坂村は現在の太津町で、旧布田手永に属し、白川左岸の村である。「文字石」は、石畳構築に多くの人々が狩り出されたとしるしとも思われ、当時の農民の苦しみが伝わってくる。「文字石」から百m下に「牛王水」がある。通称「牛王さん」と言っている。ここは往時には湧水があつて、牛馬の飲料又は通行人の飲み水となつていたところである。以前は榎の大木や枳の古木があつたが、昭和五十七年八月、山上原野に土砂崩れが起り、大木は流され「牛王さん」も荒されたが、同地にあつた地藏尊二体は無事であつた。

とある。

施主（熊本）紺屋町 大坂屋才助

金屋文平次

車埴村坂下和七寄進

とある。

天明の時代は大凶作であり、文政の時代は大

雨、大洪水と、内牧の三年連続の大火があつた。人々は、阿蘇谷から食を求め、職を探してこの道を熊本方面に流れたことであらう。

「牛王さん」に立ち寄つた人々の中にも、病人がたおれ、子供が死んだこともあつただろう。のちに篤志家が地藏尊を建立したものはな

とある。

原野地帯を過ぎて山林地帯に入り、石畳を横切る水切がある。これはこの石畳の特長とも言われるもので、左側の排水路から右側の排水路に水路を変える工法によるしかりした石組で現存している。

昭和六十年度

1 全体測量 一、六三三 m

2 伐開排土作業 一、一〇四 m

3 石畳修復工事 五九 m

伐開作業を行った結果埋もれた土中深くから石畳の全容が現われた。この土砂は山崩れによる埋土もあり、このような立派な石畳が残存していることは誰一人予想せぬところであつたから、その規模の大きき及び石組みの確かさが全線に確認されたことに、町も又、町民も非常に驚いたのである。

昭和六十一年度

1 石畳修復 一四三・七 m

2 石橋修復 一ヶ所

3 水切修復 二ヶ所

昭和六十二年度

1 石畳修復 三四七・七 m

昭和六十三年度計画

1 石畳修復 四〇〇 m

2 牛王さん水路修復

昭和六十四年度計画

1 石畳修復 四〇〇 m

石畳の周辺

二重峠石畳入口から四、五十m下ると、阿蘇谷を一望する史蹟「二重の峠」の標柱がある。標柱からさらに百m位下つた処に石畳の「文字石」がある。「岩坂村つくり」と印されたこの「文字石」は、道普請にあたつた村人の刻印である。

更に石畳を下ると石橋があり一部破損していたが修復した。

まとめ

前述のとおり石畳の修復工事を行ってきたが、石畳は、私達が考へていたより大規模であり、工法も確かなものであることに驚いた。前述計画どおりいかにも石畳道を完成したい。そして副次的なものとしてこの道を健全な体験学習、レクリエーションの場としたい。この道につづく史蹟としては、八里木（一里毎に里木がおかれた）、石御茶屋の跡（元禄時代から二百九十年も続いている藩公指定の御中食の家であり、その庭園も残り、近年名水にも指定され、当主は十三代目である。）、阿蘇山の神健磐立命が山頂より弓でねらい射つたという「神話の石」の石、九里木、御前水、十里木、内牧城跡、内牧手永会所跡、加藤右馬允墓、十一里木跡等、史蹟名所には事欠かない。

交通路は生きものである、私達が気づかない間に、又、世の移り変わりによって消えやすいのが道である。それ故に歴史の道は今保存整備しなければ先人の意志や苦勞を無にすることになるのではないかと強く感ずるしだいである。

昭和六十一年度

1 石畳修復 一四三・七 m

2 石橋修復 一ヶ所

3 水切修復 二ヶ所

昭和六十二年度

1 石畳修復 三四七・七 m

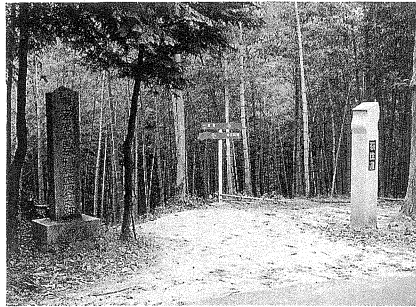
昭和六十三年度計画

1 石畳修復 四〇〇 m

2 牛王さん水路修復

昭和六十四年度計画

1 石畳修復 四〇〇 m



萩市 大屋刑場跡附近(整備後)
(写真提供=萩市教育委員会)

萩往還の地理的環境

歴史の道萩往還は、萩唐樋札場跡を起点として南東に向い、明木、佐々並と中国山脈を越えて山口へ出、山口からはほぼ平坦な道をすすみ、佐波川を渡り三田尻船場跡を終点とする約十二里(五十二・七キロメートル)の行程である。このルートから見れば、山陰から内陸方面へ中国山地を越えての道であるため、起伏も大きく高い峠を持つ内陸横断型の道であることに特徴がある。

最も高い峠は、萩往還の中間点附近にある板堂峠で五百四十メートルある。したがって、この峠の南側の山口市一の坂と、北側の旭村一升谷附近が急な勾配を持つこととなり、道を往來する人の一番の難所であった。

市町村名	行程(里)	整備距離(里)	その他の整備
萩市	五・六	七・四〇	一里塚の復元
旭村	一九・三	三・〇八八・二	石蓋の復元
山口市	一九・八	二・四八二・〇	一里塚復元
防府市	八・〇	一	道標、案内板等設置
計	五二・七	六・二九四・二	

整備工事にあたっては、地権者や地元関係

等を示したものである。

次の表は、関係市町村における整備の状況

萩往還の整備

私は、十数年前、明治維新百年事業として、旭村日南瀬から山口市天畑錦鶏の滝まで生徒達と歩いたことがあるが、雑木と雑草に蔽われた路は、往還道としての面影は見当たらず、路なき路を行くようであったことを思い出すのである。昭和五十五年度から、萩往還の調査が始まり、現地調査をされた先生方もそうした感想をお持ちになったことであろう。

萩往還の復元整備工事は、昭和五十六年度から実施した。整備工事に先立ち国、県、市町村担当者で協議された事項は、おおそ次のとおりであった。①民有地等との境界を確認する。②道幅は、二間を基準とする。③側溝等は自然石を使用する。④農道など生活道として利用されている部分は除く。以上の他、道に付属する遺跡等の整備、整備後の維持管理の問題などが話し合われた。

今後の活用

萩往還の整備は、大半を完了しており、年々整備された道を探訪する人が増えていることは、誠に喜ばしいことである。

今後は、利用者のために案内パンフレットなども準備する必要がある。

この萩往還道には、全行程の中間位置に青少年のためのキャンプ場も設けた二十一世紀の森という自然に囲まれた施設がある。

この位置から宮野方面へ山を下ると、一の坂銀山跡や荒谷ダムに通じ、さらに国土庁のモデル事業として建設された山口ふれあい館へも通じることとなり、そのための遊歩道の整備も計画されている。

このように、周辺の諸施設と有機的に結びつき、相互に関連を持ちながら萩往還を利用し、活用することは、子どもたちから成人者まで、歴史を学ぶ体験学習の場として生かされることであると信じている。

萩往還の整備



山口県山口市教育委員会
教育長 山城右二

はじめに

江戸時代中期、萩毛利藩の絵画方をつとめた有馬喜三太は、宝暦末期(一七六三)に中国行程記という街道絵図を描いている。全八巻からなり、藩府萩から伏見京境まで詳細に地名や説明を加えている。

この行程記は、藩主の参勤や下向の折の旅のつれづれを慰め、地誌的知識を得る資料として画かれたもので、街道を中心として登りと下りで街道の左右が対称的に画かれている。このうち第一巻に、萩から三田尻(現在の防府市)までの沿道の様子が記されている。この萩から三田尻までの道を、「御成道」と呼ぶのは「萩往還」と呼んでいたのである。

萩往還の成り立ち

山口県地域における道の歴史を見る場合、古代においては、都と筑紫大宰府を結ぶ山陽道があり、あるいは都から石見国を経て山陽

道に合流する山陰道があった。山陽道は特に官道のうちでも大路の扱いを受けるなど、政治、外交上最も重要な道であった。

中世にいたり、周防、長門を支配下におき、山口に居館を造営した大内氏が、山口を中心とした新しい道路網の整備に努めたことは画期的なことであった。

大内氏は、京都を模した町づくりを行い、城下町としての機能を充実させると同時に、山口を中心に置いた放射状に延びる領内内の道の造営、整備、さらに規制にも意を注いでいる。夜中に大路を往來することを禁じ、武器を持つて通行することを禁じ、領内各地から山口までの所要日数を定めるなど、山口を軸とした計画的な領内内の支配体制を整えていったことがわかる。

当然に、当時の萩往還は、山口から萩、山口から三田尻へと、山口を起点とした道であったことが伺える。

慶長五年(一六〇〇)関ヶ原の合戦にお

いて西軍についた毛利輝元は、防長二州への削封により防長入りすることとなる。さらに徳川幕藩体制の地理的統制によって萩への築城となる。以後、山陰の一寒村であった萩は、毛利氏の築城、城下町としての経営等、急激な変貌を見せることとなる。必然的に、周防、長門の道路網は、萩を中心とした道へと再編されていくこととなる。

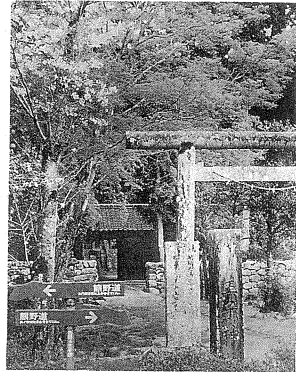
参勤交代と萩往還

毛利藩にとって、参勤交代のコースは、萩を出発し、明木、佐々並、山口を経て三田尻まで進み、三田尻から乗船し、大阪まで海路をとり、その後は京都、桑名等を経て江戸へ至る、約一月がかりの行程とされていた。

しかしながら、享保十二年(一七二二)からは、三田尻から山陽道を東進する陸路へ変更されている。

萩毛利藩が、領国内で本往還道として重視したのは萩往還であった。地方領内の一支線にすぎない道が、萩藩にとっては参勤交代に供される「御成道」であり、政治的に最重要路に位置づけられた道であったといえる。

こうして萩往還は、本陣、脇本陣、お茶屋、旅籠屋などの施設が整えられ、駕籠建場、番所、高札場、国境塚、一里塚などが整備され、道の両側には道松が植えられた。これらの施設は、一般の通行人を対象とするものもあつたが、主として藩主の往來に必要な施設として整えられていったのである。



熊野参詣道



古道整備記念歌碑 (石倉峠)

さらに当地方にとっては一大事変であった文久三年（一八六三）九月の大和での天誅組騒動の時には、浪士の残党が雲取越で海岸に出るとの風聞から、那智山防衛の任を帯びた色川組大庄屋からの要請を受けた大山組大庄屋は、石倉峠と越前峠の間で、道の左右か

間降水量も高い当地方ですから、路面が雨水の流路となる恐れのある箇所では石畳を敷いて表土の流失防止を考える必要があったわけ、粗雑なものとはいえ山道の保守に対する先人の知恵に頭がさがります。

この古道も本来は集落と集落の連絡路であり、生活の為に道でした。また、山林労務に従事する人々には作業路としての機能も併せ持っていました。近世には、通行する藩役人の荷持ちや籠かき、また、その先触れの書状を送り届ける村継ぎの夫役に、長井村の人々は請川までの小雲取越を、大山村の夫役は那智までの大雲取越の長路を駆けぬけた模様です。

今後の課題
だからと言って整備の完了を喜ぶだけでは

ら樹木を伐り倒して障害物とし浪士の通行を妨害する手段を講じたとの記録もあります。里人にとっては生活路であり作業路でもあり、かつまた、熊野詣の道者には信仰の道、祈りの道でもあったこの道も、熊野信仰の衰微なかんずく修験道の衰退と、新たな車道の開通、交通機関の発達によって信仰の道としての機能を失い、さらにエネルギー源としての役目を果していた薪炭林もその役目をうばわれ、建築用材として利用度が高かった杉檜を主体とした森林資源も主役の座から遠ざかるなど、もろもろの要因が重なって山村の過疎化が進むに伴い、生活路や作業路としての利用度まで低下して廃道に近い状況にあったこの道が、今回の整備事業によっていくらか生氣を取戻したことに道沿いに住む住人の一人として素直に喜びたいと思います。

いけません。今後の保守を怠っては元の木阿弥であろう事は自明の理でしょう。これまで自分達の道であるとの認識から主体的に道の保守にかかわっていた里人の意識も公的機関が整備を担当したことを契機として、自分達の道であるとの気持ちに変化が生じ主体的に道を保守しようとする熱意が減退したように思えます。向後は整備事業を担当した町及び町教育委員会が積極的に保守に取組むことが肝要といえます。

最後に愚痴とは承知しつつ古道の将来的な保守には道沿いの植生の保全に意を払う必要を訴えたいと思います。当町内の古道が原形に近い状態を保っていたのは里人の手入れもさることながら、集落からはなれた手入れのしにくい所は道の左右の植生が古木で安定していたことが大きく影響したと言えるからです。

それにつけても近世地方文書で見える限りでは、この道沿いの山林は、近世には全て村持山であったようでも部分的には町有林として名残りをとどめています。多くは近世末以後に未進年貢の処理などともう理由で私有地となってしまうようで残念に思います。道はその周辺と一体のものであり、植生の保全が道の保守に大きくかわかることを考える時、二百年以前の村持山が今も町有林として保持されていたならなあと強く感じます。

熊野古道雲取越

和歌山県熊野川町教育委員会
前教育長

木村 靖



熊野古道の歴史

昭和五十二年度から六十年代にかけて文化庁の指導のもとに整備された熊野古道は、熊野参詣道のうち中辺路と称される道です。熊野川町はこの古道整備事業の中で、那智と本宮を結ぶ通称雲取越二十八kmのうち十三kmの整備を担当しました。

古代から中世にかけての上皇や女院による熊野御幸での三山めぐりには、本宮→新宮→那智→新宮→本宮を順路とすることが多く、那智から雲取越で本宮へ向うことは稀であったよう、この雲取越の道は御幸道としては脇役的存在であったと思われる。

建仁元年（一一〇一）後鳥羽上皇の御幸に随行した藤原定家はその日記に、「廿日（十月）、自曉雨降無松明、待天明之間、雨忽降、雖待晴間弥如注、仍當出一里許行、天明風雨之間、路窄不及取笠、著蓑笠、與中如海如林宗、終日超嶮岨、心中如夢、未遇如此事、雲

トリ紫金峯如立手、山中只一字有小家、右衛門督宿也、予相替入其所、如形小食了、又出衣裳、只如入水中、於此辺過雨止了、前後不覺、戌時許著本宮付寝、此路嶮難過於大行路不能追記」と記述しています。発熱と下痢になやみながらの雨中の雲取越は、定家にとつて興に乗っていても大変な難行だったのでしょう。もしも季節が暖かければ山荘にもなやまされたろうとも想像します。御幸の道中の最大の難所がこの雲取越であったろうと思われまふ。

その熊野御幸も弘安四年（一一八一）龜山上皇の御幸が最後となったよう、以後は公家貴族の熊野詣は下火となりますが、それに替って三山の御師・先達を始め修験者や熊野比丘尼による熊野詣の勧誘が盛んに行われるようになりました。また一方、一遍を開祖とする遊行上人によって（熊野神は）「信不信をえらばず、浄不浄をきらわず」とその御利益が紹介された事なども加わって、全国各地

から多数の道者がこの道を通行するようになりました。

近世になって熊野信仰は多少衰微はしたものの、伊勢参りや観音霊場巡りと結びついて各地から多くの順礼集団がこの熊野古道を通り過しました。拙宅近くの路端の茂みの中に、天明丙午六月廿四日、善道自得信士、武州埼玉郡西川辺領平野村、同行九人、俗名染屋助四郎」と読みとれる小さな墓碑が見えます。全国各地の人々がそれぞれに願いや祈りを胸にひめてこの道を通行したのでしょう。

古道整備を終えて

当熊野川町が担当した古道整備工事は道を原形に近い形に復元する事を基本に作業を進めましたので、崩れた路肩の石積みや石畳の補修とか雑草木の刈払いが主な工事内容となりました。元来当町内の古道は最近まで里人の利用頻度も比較的高く、里人も自分達の道であると感じていて、年に一度は夫役として区民総出で雑草木の刈払いを実施するなど里人によって保守されていたので、整備の前と後とで特に大きく変貌したわけではありません。

整備事業を終了して感じるものの一つとして石畳のことがあります。

古道には石畳の箇所が小規模ながらも点々と存在します。それ等はすべて雨水によって表土の流失が起きやすい箇所を石を敷きつめていっているものです。年間降水量が多くしかも時

特 集：歴史の道整備の十年

府県名	年度	調査対象街道名称
三重	61	東海道ほか ※
	61	熊野街道（小栗街道）、紀州街道、父鬼街道、粉河街道、大木嶺、楨尾嶺、根来街道、井間越、箱作越、東畑越、西畑越 ↑
	62	東高野街道、西高野街道、竹の内街道、下高野街道、中高野街道、天野嶺、楨尾嶺、千早街道、富田林街道、水越嶺、平石嶺、釜蓋越 ※
奈良	57	初瀬街道
	58	竹の内街道（二上山麓の道）
	59	伊勢本街道
和歌山	52	熊野街道
	53	熊野街道
	54	高野山参詣道、南海道、大和街道、淡島街道、上方街道
山口	55	高野・竜神街道、修験の道
	56	竜神往来、修験の道（大峯熊野修験）、河川交通
	57	河川交通及び海路交通
大分	55	萩往還 ↑
	56	山陽道（岩園～徳山～防府～山口）
	57	山陽道（宇野～下関）
熊本	54	肥後街道、伊予街道、日向街道（豊前道）
	55	動休街道、放生会道、行幸会道、峯入りの道
	56	奈多行幸会道、永山市政所路(IX2)
宮崎	60	岡城路、臼杵城路 ↑
	57	豊後街道
	58	豊前街道、日向街道、薩摩街道 ↑
沖縄	58	人吉街道、天草路
	61	菊池川水運 ↑
	62	球磨川水運、庵蓋路・肥後峠越 ※
愛知	52	都農、高城、都祁郡往還、豊後街道、高千穂往還、田代及び水清谷、渡川経間椎葉山往還、椎葉山往還
	53	米良街道、舩後街道、鶴戸街道、志布志街道
	54	肥後街道、薩摩街道、諸塚間道
三重	58	末吉宮参詣街道、真珠道
	59	国頭・中頭方西海道(I)、弁ヶ嶽参詣道
	60	国頭・中頭方西海道(II)
富山	61	島尻方街道ほか
	62	東海道 ※

計 24府県 (注) ※報告書未刊行、*報告書と併せて総集編刊行、↑報告書と併せて資料編刊行

別表 2

番号	都道府県名	事業者	街 道 名	特 色	事業年度
1	宮 城 県	鳴 子 町	出羽仙台街道中山越	おくの細道、原米の関	53～56
2	"	岩 出 山 町	"	千本松長根	54～56
3	山 形 県	最 上 町	"	封人の家	56、59～62
4	"	尾 花 沢 市	"	山刀伐越	61～62
5	長 野 県	南 木 曾 町	中山道	木曾八景寺川越、妻籠宿	53～56
6	"	和 田 市	"	和田峠、和田宿	53～58、61～62
7	岐 阜 県	恵 那 市	"	西行塚、大井宿	62
8	和 歌 山 県	本 宮 町	熊野参詣道	本宮、湯ノ峯越	53～57
9	"	中 辺 路 町	"	大坂越、悪四郎越	53～57
10	"	熊 野 川 町	"	小雲取越、大雲取越	54～57
11	"	那 智 勝 浦 町	"	大雲取越、大門坂	56～60
12	"	田 辺 市	"	潮見坂	61～62
13	山 口 県	山 口 市	萩往還	六間茶屋	56～62
14	"	萩 市	"	かせが坂峠	57～60
15	"	旭 村	"	千持だお、ちょうのざり石畳	57～62
16	"	防 府 市	"	三田尻お茶屋	61
17	熊 本 県	薩 山 村	豊後街道	大利弁天石畳	59～62
18	"	阿 蘇 町	"	二重峠石畳、石のお茶屋	61～62
19	"	一ノ宮町	"	滝壺坂、坂梨お茶屋	62

特 集：歴史の道整備の十年

別表 1

府県名	年度	調査対象街道名称
青 森	57	羽州街道、松前街道（奥州街道2）、乳井（高田）通り、大豆坂通り
	58	西浜街道（鰐ヶ沢街道）、百沢街道、十三街道、下之切通り（小泊道）、黒石・山形街道
	59	奥州街道(一)、鹿角街道、上り街道（八戸街道）、久慈街道
岩 手	60	田名部道、北通道、北浜街道、西通道
	53	奥州道中、奥の細道
	54	気仙沼街道、今泉街道、院内街道、仙北道、平和街道、秋田街道
宮 城	55	浄法寺・八戸街道、小本街道、宮古街道、大槌・金石街道、盛街道
	56	浜街道、久慈・野田街道、沢内街道
	52	奥州街道、笹谷街道、一関街道、松山街道、水戸街道、七ヶ宿街道
秋 田	53	奥州街道、笹谷街道、出羽海道一中山越、金花山道
	54	二口越最上街道、関山越最上街道、江戸浜海道、気仙道、最上街道（田代西崎越・軽井沢越）、上仙北道
	55	仙北道佐沼・登米道、涌谷・登米道、角田道・相馬道、白石・角田道
山 形	58	北国街道（酒田街道）、男鹿街道（湯西街道）、大関越街道
	59	北部羽州街道、五城目街道、阿仁街道、鹿角街道、米満街道、濁川街道
	60	南部羽州街道、生保内街道、角館街道、刈和野街道、平和（小松川）街道、大寛野（阿仁）街道
山 形	61	亀田街道、矢島街道、川大内街道、本荘街道、男鹿街道、手倉街道、須川街道、沼館街道
	53	奥の細道(一)、羽州街道、笹谷街道、最上川(二)
	54	出羽三山参詣道、最上川(三)、六十里越街道
福 島	55	浜街道、小国街道、越後街道、米沢・板谷街道、二井宿・大塚街道、会津街道 *
	56	最上小国街道、仙台街道（軽井沢・寒風沢越）、青沢越え、村山西部街道、関山街道、二口街道、狐越え街道、小滝街道、茂庭街道 *
	57	奥州道中、羽州街道、米沢街道、相馬街道、二本松街道
群 馬	58	白河街道、米沢街道、越後街道、下野街道（南山通り）
	59	水戸街道、浜街道、岩城街道、御所街道
	60	沼田街道（八十里越、六十里越、銀山街道）
埼 玉	54	足尾銅山街道、日光例幣使街道
	55	三國街道、信州街道、沼田・会津道
	56	下仁田街道、清水峠越往還、古戸・桐生道、佐渡奉行街道、古河往還
千 葉	57	利根の水運、中山道、十石街道
	58	鎌倉街道、東山道、日光の脇往還、吾妻の諸街道
	59	県内鎌倉街道伝承地所在確認調査
富 山	62	鎌倉街道上道 ↑
	58	日光御成道
	59	日光道中、日光脇往還
富 山	60	中山道、秩父往還
	61	荒川水運、新河津川水運
	62	入間川水運
富 山	61	成田街道、佐倉道
	62	水戸道中、鯉魚街道、日光東往還、木下街道、江戸川・利根川水運
	53	飛騨街道（その1）
富 山	54	北陸街道
	55	立山街道、氷見能登道、飛騨街道（その2 五箇山道）

解 説

歴史の道の調査と整備 —この十年間の歩み—

文化庁では昭和五十三年度より古道や運河等の保存・整備をめざして歴史の道の調査・整備事業に着手しました。今年でちょうど十年を経過したことになります。この事業では最初に古道そのものの残存状況を調べ、ル―

トの確定を行うとともに、道にかかわる周辺の遺跡・文化財の調査を行います。

昭和六十二年度までに調査が終了したのは別表1のとおりで、二百七十余冊の調査報告書が刊行されました。この調査の結果を踏まえて歴史の道の整備は行われます。車交通の発達で長く廃絶していた道は、その復旧から

始めなければなりません。埋土の下から石畳が検出されることもあり、その場合は痛んだ部分を修理して再び石畳の上を歩けるようになります。

現在、整備事業を終了しない実施中のところは別表2のとおりです。整備が終了した歴史の道は史跡に指定し永久保存する予定で、昭和六十二年十月三日に中山道が史跡に指定されましたが、出羽仙台街道中山越、上街道熊野参詣道についても既に史跡指定の文化財保護審議会答申がなされており、近日中に史跡指定となる見込みです。

（文化庁文化財保護部記念物課）

編集後記

今月号は、歴史の道の調査・整備事業を特集に組みました。この事業は、昭和五十三年に始められたもので、この十年間の成果と進捗状況について、関係者の方々に報告をいただきました。現代の道路は、車で唯ひたすら目的地に到達するため、途中の景観も十分楽しむこともなく走るだけのものになりがちですが、この十年間に掘り起こされ、再現された古道では、歴史上の人物が歩きあるいは歴史の「ページ」を書き換えるような出来事もあったでしょう。往時を偲びつつ自らの足で歩くのも趣があり、文化的活動ともいえるのではないのでしょうか。

来月号でご紹介いたしますが、文化庁昭和六十三年度予算政府原案は対前年度四％の増額となりました。これは昭和五十五年以降の伸び率で、職員全員はきっています。

(K)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)3681-2411(代表)

「文化庁月報」二月号

(通巻第233号)

昭和63年2月25日印刷・発行
編集 文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい

本社 〒100東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒100東京都新宿区西五軒52番地

電話 (03)2681-2411(代表)

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 財行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)
年間購読料 二、一六〇円(送料共)